

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雑詩：文苑
Author(s)	吉田，紫陽
Citation	龍南會雜誌， 9 2： 3 2 - 3 3
Issue date	1902-05-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5336">http://hdl.handle.net/2298/5336</a>
Right	

又曰。快絕。

又曰。維武。

又曰。維文。

又曰。回顧起首。

又曰。已叙南征了。更想起再游四方之日。又有神韻。

又曰。綴束全篇。有力。

文

苑

十二社。惡木森森密雲鎖。時時出境攫人頭。馘之上架紫血灑。從茲征蕃吾不策。處處只合建城柵。幕下懷柔終何爲。干戈乾坤快一擲。不殲此賊非英雄。千載長仰鄭家風。況復帝子英魂毅魄在。劍潭貂嶺弔遺蹤。風流別有入夢際。承天會區皆繁華。最憶紅欄三百六。蠻歌迎客聲聲和。如此邊荒多詩料。可因文字無嘯傲。嘯時莫以字爲累。此累一到興不到。我聽君語一嘆嗟。嘆嗟不復喚奈何。且我爲君著文字。任他長歌又短歌。嗚呼君詩已浩蕩。有之何處不可往。他日儻有再遊時。一帆南島看潮上。吳楚閩粵去又來。指點洞庭彭蠡面。更過江河起相望。萬里崑崙安在哉。此去一遊猶可續。燕市鼓刀趙擊筑。秦有擊甕叩。佩彈箏搏髀人。歌呼嗚嗚快耳目。彼能然諾意氣投。相邀直上百尺樓。裸身不用狂談笑。何況提詩謁王侯。不知其西何王國。黯黯雲沙詩欲黑。君應到此擲筆回。豈謂是詩無所得。詩乎詩乎奈何邊。古今文字不足塞。只願與君江山走。朗吟三代詩人之詩三百篇。不然花枝代絲筆。江雲山雲代錦牋。此筆一揮詩飛動。瞻彼天花繽紛墮我前。

星江漁長曰。着意跌宕飄逸。措辭古勁典確。決非尙浮靡雕繪者之所夢想也。

又曰。一篇大文字。貫之以神機。行之以神彩。故能姿態橫生。有波瀾。有開闔。有照應。有曲折。布置得宜。轉換極妙。令人一讀再讀快心暢神。固不可與夫字束句縛貌襲形似之輩同日而論也。

東郭散人曰。喝破詩理。雄偉磊落。直與韓蘇爭勝。而其風格則一出于己。非才之奇。安能得如此。

雜詩

登花岡

吉田紫陽

石。逕。登。小。有。小。宮。櫻。花。爛。熳。春。風。關。頭。曉。望。情。何。繫。城。市。分。明。指。顧。中。

## 春 雨

熊本市所見

屋。前。屋。後。落。花。飛。水。北。水。南。芳。草。肥。日。永。閑。人。爲。底。事。唯。看。細。雨。滴。鶯。衣。  
 清。明。時。節。雨。餘。天。街。上。絮。飛。垂。柳。前。此。地。從。來。是。雄。鎮。東。風。城。郭。帶。春。煙。  
 風調婉約含蓄不盡得絕句妙處 東郭散人批

## 和 歌

## 春 海 棠

序

吉 田 雛 羊

空には、星の花あり、野には、草の花あり、紫の山あり、明かなる水あり。仰ぐところ、俯すところ、自然は、一に美妙ならざるはない。宇宙は、神の愛の顯現である。眞に、此天地は、平和、喜樂、希望の滿つる世である。然し見よ、恍洋たる大海の光景を、海底の水は、油々として、靜かに流るれども、海表の波は、朦朧たる大艦を覆すこと多いではないか。

靜と動と、樂と苦とは、宛ながら、物に表裏のある様で、自然と人生とに於ける免れ難い常數である様に思はれる。だから、樂天喜地と思はれる此世界も皮想的に觀察すれば、厭世思想の病的に流れざるをえない現象があるのである。だから、喜樂の滿つる世と思つた天地は、やかて、悲しみの滿つる野となり、涙の充つる谷と觀するに至るのである。

小生は、人生生活の青春時代に於て、眞に人生の重荷と辛酸とを負ふて悲しみの野、涙の谷の眞中